

II  
東南アジア

## 都市は映画、地方は闘鶏

山本一巳

### 多彩な娯楽の歴史

フィリピンはスペイン（約三三〇年）、アメリカ（約四〇年）の長い植民地統治下に置かれ、その間に各民族間の通婚もすんだことから、それ

ら旧宗主国の風俗・習慣が持ち込まれ、多彩な娯楽が花開き、定着し、現在に受け継がれている。スペインから持ち込まれたハイ・アライ、スペイン植民地下で国家統一のために始められたフィエスタ（祭り）、それ以前に存在していたがフィエスタの開始により制度化された闘鶏、万聖節・クリスマスなどのキリスト教の宗教に関わる行事、誕生・入学・卒業などの家族に関する行事、などが昔からフィリピン人の大きな楽しみとなっている。

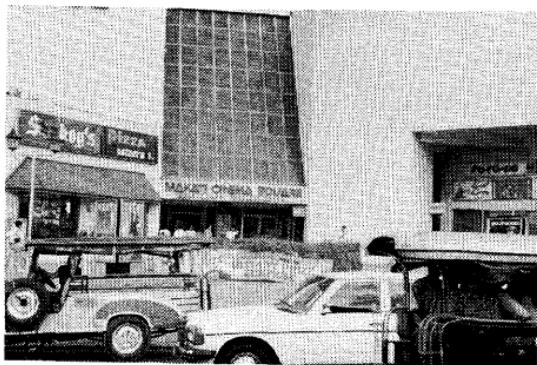
コミュニティ・レベルでは、全員が参加するフィエスタが最大のものである。都市ではその重要性は薄れたとはいえ、田舎では最大の楽しみで、全国四万七五〇のバランガイ（行政の最

小単位)で必ず一回は行われる。郷里を離れた人はフィエスタのために帰郷する。このフィエスタには美人コンテスト、舞台ショウ、カーニバル、豊富な食事がつきものである。前アキノ政府は一九八九年を「フィリピン・フィエスタ年」とする行政命令を出し、観光客誘致を図ったほどである。

これに対し、都市では娯楽は多様化しており、一般的な映画・音楽会・観劇、カジノ、競馬などの賭ごと、スポーツ、特にバスケットボールの観戦と実践(フィリピンにおいてスポーツでプロチームがあるのはこれだけで、選手は映画スター並みの人気を博している)、夜の生活ではディスコ、バー、クラブ、カラオケがあり、さらには行楽地へのビクニック、特にマルコス政権崩壊後のマラカニアン宮殿見学は庶民に流行した。近年ではショッピング・センターでの買物・食事が中産階級の間で一般化しつつある。

### 娯楽の王者——映画

**映画** 映画はテレビ・ビデオの影響や娯楽の多様化により多くの国で斜陽化しつつある。しかし、フィリピンでは話が違い、映画が今でも庶民に最も親しまれ、都市での最も安上がりな娯楽である。一九九二年九月現在、映画料金は一五ペソ(七五・七五円)、二〇ペソ(一〇一円)で、他のASEAN諸国に比べると安い。ちなみに、タイで一〇〇~一四六円、マレーシアで二五〇~三〇〇円、シンガポールで三一〇~三九〇円、インドネシアで三〇三~四三〇円である。最新の外国映画が世界の他のところと同時に封切ら



パサンタマ通りのシネマ・スクエア外観  
(撮影:二村泰弘)

れる。

一般に、マニラ首都圏人口の約三分の一は映画の常連客であるといわれる。一九八九年二月に行われた全国階層別無作為抽出による五六六九人の面接調査によれば、映画を見ると答えた人はマニラ首都圏で実に七八%にのぼっている。地方ではこの比率はかなり減少し、最も少ない地域で三三%，最も多い地域で五八%となっている。

一九八九年上半期に上映された映画数は一八五、うち外国もの一三二、国内もの五三となっている。映画内容別にその内訳をみると、アクション五五%，コメディ一八%，ドrama一一%，サスペンス一〇%，ファンタジー四%，アーメー%となっている。映画館の数は八八年初めで全國に九一二館を数え、首都圏にはそのうちの二一%にあたる一八九館が立地していた。

映画のフィリピンでの歴史は古く、すでにフィリピン映画が一九一九年に製作されている。その後、五〇年代の第一次フィリピン映画黄金時代にはフィリピン映画は多くの国際賞を受賞

している。映画スターになるのは少年・少女の夢となつていて。現在の副大統領であるエストラダはかつて映画スターであった。

フィリピン人の外出好き、派手好み、映画料金の安さ、低生活水準等を考慮すると、映画はこれからも当分フィリピン人の大きな娯楽であり続けるだろうと思われる。

### 伝統的な娯楽——闘鶏

盛んなところはない。アキノ

前大統領の実弟であるペピン・コファンコが「フィリピンで真の革命を実現しようとするならば、闘鶏を禁止することである」と語った話は有名である。それほど各階層に根づいていることをうかがわせる。さらにフィリピン人は闘鶏をスポーツとみなしている。

闘鶏はすでにスペイン植民地前からフィリピンで行われていた。一五六五年、レガスピ探検隊に同道した聖職者がブツアンの住民がすでに闘鶏試合を開催していたと



パサイ闘鶏場の様子（撮影：二村泰弘）

記録している。フィエスタの開始により闘鶏は制度化され、闘鶏なしにはフィエスタは完全とはいえないなつた。

各国で闘鶏が消えていくなかで、フィリピンではよりすぐれたゲーム用の鶏をテキサスから輸入するなど、その改良が行われた。以前はゲームの愛好者は下層、中流階級であったが、第二次世界大戦後上流階級に流行し、現在では階層を問わず愛好されている。かつて町・村でもポピュラーなところは教会、市場、闘鶏場といわれたものである。

闘鶏はスポーツとフィリピン人は答えるが、ギャンブルである。ただし、競馬、競輪、カジノなどの他のギャンブルと決定的に違うのは人間が関与していず、クリーンな勝負であることである。勝負は一分もかからない。判定はレフェリーに絶対的な権限が認められている。

自分の育てた鶏に当日財産のすべてを賭ける者も多い。二村泰弘在マニラ海外派遣員（当時）がパサイの闘鶏場でヒアリングしたところでは（一九九二年十月）、一週間に三回開催、それぞれ一回に五〇試合が行われる。入場料は三〇ペソ、リング側はさらに二五ペソ追加され、一試合の最低賭金は三三〇〇ペソとなつていて。賭のやりとりでは特殊な専門用語が飛び交い、いやが上にも熱気を煽つてゐる。闘鶏はフィリピン人のなかに完全に根づき、今後も少なくとも地方では大きな娯楽としてフィリピン人の間で親しまれ続けるであろうことは確実である。

（やまもと かずみ／アジア経済研究所開発研修室長）